
LOVE SICK

立花透琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE SICK

【Nコード】

N8504L

【作者名】

立花透琉

【あらすじ】

高校の時にキスを交わした二人。
しかし、友人としての関係を保ちながら大学へと進んだ。
ある日、その関係が崩れようとしていた…

- 1 - (前書き)

大学生のボーイズラブになっています
苦手な方は閲覧注意です

想っても

想っても

きつと貴方は振り向かないだろうけど

それでも、近くにいてくれるだけで良いなんて…

しみつたれたラブソングみたいで笑ってしまう

だけど本心

キミがいてくれれば、それだけで満足

「明日、出席票出しといてくんね？」

同居人の鴨井祐也^{かもいゆうや}に言われたのは、バイトから帰宅してすぐ。

『ただいま』の返事も無く、これが第一声。

「ミヤ、明日は一行行くだろ？」

「行くつもりだけど…。祐也は？」

「俺、明日は行けない。多分帰らないから、よろしく」

「はあ？」

思わず変な声を上げたのは、こいつが帰ってきたのは今さっきの事だから…

俺：たのうえみやび田之上雅は、バイトしてて祐也が帰宅したのがいつだかも知らない。

ただ、昨夜もいなかったし朝もいなかった。

大学から戻ってきて、バイトへ行く間にも帰ってこなかった。

つまり、俺がバイト中に帰宅したことになる。

それなのに…

「また女のどこかよ」

「ま…ね」

「今度は…誰？」

「どっかの女子大の子。シゲからの紹介」

つまらなそうにタバコを加える祐也に、俺は派手にため息をついた。

いつもこんな感じ…

誰かしら女がいて…それは別に誰でも良くて…

実際、こいつはかつこいいと思う

187の長身に、流行りを外さない格好
茶髪に見えるその長めの髪は、脱色したわけじゃなく地毛らしい。

俺には無いものを持つアイツ…

成績も悪くない

（良いわけではないけれど…）
スポーツも出来る。

高校で出会ったこいつは、いつでも目立っていた。

だから、こいつの女関係も派手だった。

いざこざがおきないのが不思議なくらい…

「紹介されたからって、すぐに朝帰りかよ」

高1からつるんでるから、大学二年の今、5年のつきあいになるが
祐也の女関係にはどうもついていけない

「もう少し考えれば？」

「考えたって結局は一緒だろ？やるもんはやるし…」

朝まで付き合うつて事は女だってイヤじゃないんだろつし…」

「あっそ…」

俺は半分呆れながら、バイト帰りに寄ったコンビニの弁当を冷蔵庫に放り込む。

その背後から、祐也が俺の体を抱きしめてきた。

「ミヤ…」

小さく耳元で囁く声

俺はゆっくり振り向く。

168の俺では、祐也を見上げる形になってしまっ

祐也のブラウンの瞳に映る俺の姿は、祐也とは逆の冴えないスタイル

なんだかそれだけで凹む

「ミヤ…」

もう一度、祐也が俺を呼ぶ

そして近づく顔

(やっぱ…かつこいいんだよなあ)

俺はぼんやりと思いながら、唇に軽く触れてくる祐也のそれを感じた。

- 1 - (後書き)

もう少しお付き合い頂けると嬉しいです

高1から気付けばよく一緒にいた。

一緒にバカやって、一緒に怒られた。

最初にキスしたのは高2の秋

きっかけは忘れたけど、遊びのようなキスに、俺はあいつへの気持ちに気付いた

一緒にいるのは楽しかったけど、それは友人だからだと思っていた。

だからキスした時、自分でも驚くほどあいつを意識した。

俺は、祐也が…好きだったんだ…

だけど、一度も気持ちを打ち明けた事はない。

祐也の女関係は高校から変わらないし、

気持ちを打ち明けて、離れていく位なら友人として続けていききたかったから…

それでも…時々、遊びのようにキスをする

ただ、それだけで嬉しかった

大学が同じだと知ったのは、卒業も間際

『俺さゝミヤと同じ大学に行くことになった』

卒業を祝う会と称した食事会で、隣に座った祐也からの言葉

『え？同じ大学受けてたのか？』

『いくつか受けていたんだけどさ。で、お前と同じところ受かったし

…』

大学に行けば、離れ離れになるだろうと覚悟していた俺にしたら、嬉しい出来事。

しかし、顔には出さず

『じゃあ、4月からよろしくな』
と返した。

だけど、あいつは更に俺の気持ちを舞い上げた。

『でさ、家・・・出ようと思ってんだよね』

『ふうん、いいじゃん。一人暮らしならさ、女呼び放題だしな』

『別に女呼びたい訳じゃねえけど…。いい加減、親がうるせえのよ』

『まあなゝ。うちも同じもんだよ』

『じゃあ、一緒に住もうぜ。家賃折半すりゃそれなりのところに住めるだろうし…』

お前となら気兼ねいらねえしさ。食事とか掃除とかは交代にすりゃいいだろ?』

そう提案してきた祐也に俺は当然OKした。

ただ、時々帰らない夜や、女と歩く姿を校内で見たりすると、ひどく落ち込むのだけだ…

一緒に住んでいる分、今まで見えなかった私生活が見えてくる。

部屋の中で鳴る携帯。

メールの時もあるし、電話の時もある。

電話の時は、向こうも気を使うのだろう。

リビングから出て、自室へ行く。

しかし…3DKの学生をターゲットにした安アパート。

自室にこもったからと言って、防音完備なわけではない。

時折聞こえる会話の端々が、凄く楽しそうで…居た堪れない気持ちになる。

次の日…

「雅!」

「シゲ…」

一限、祐也の言うとおり出席票を提出し、俺は授業を終えた足で食堂へ向かう。

その途中、友人のシゲ……松山一茂に声をかけられた。

「祐也は？」

「彼女のところ」

「ああ、俺が紹介した子？」

「そう」

シゲは大学からの友人

地方から出てきたから、こっちで一人暮らしをしている

「美人だろ」

「俺は見えないよ」

「写メ送っただけだな。なんでもミスなんとかってやつみたいだぜ」

「……シゲ……おまえもよく知り合っただな。そんなレベル高いの」

こっちに知り合いがないシゲは、サークルのコンパに進んで参加していた。

恐らくそういうところで知り合っただろう

「レベル高いの狙ってるからな」。おまえにも誰か紹介してやろうか？」

まるでどっかの親戚のおばちゃんかのように知り合った女の子を友人に紹介しているらしい。

（……シゲ……良い人で終わりそうなタイプだよな）

本人が聞いたら怒るだろうと、口には出さないが

こうやって橋渡しをしている姿しか見ないのもどうかと思う。

「俺はいいよ。彼女がめちゃくちゃ欲しいわけじゃないし…」

「でも、エンジヨイ！キャンパスライフ！って言ったら彼女じゃねえ？」

「別に？バイトも楽しいし…」

実際、高校の時も何人か付き合った事があった。

祐也への気持ちを確信してからも、その気持ちを振り切ろうと女の子と遊んだりもしたが…結局無駄だった。

相手だってバカじゃない。

祐也みたいにビジュアルが良ければ「気持ちが無くてもいいわ」くらい言えるだろうが

そんなビジュアルを持ち合わせていない俺が相手ならば
気持ちが伴わなければ、相手だって離れていく。

それを頑張って繋ぎとめるほど、俺も相手に気持ちがあるわけじゃない…。

「雅もさー、顔は悪くないと思うんだよな」

「…」 顔は”ってなんだよ？」

「いや、ほら…なんつの？ジャニ系っていつの？可愛い顔立ちではあると思うよ」

「男が男に可愛いって言われても嬉しくないし、そんなフォローはいらない」

伊達に生まれてからずっと、この顔と付き合ってきたわけじゃない。自分の容姿など自覚している。

「マジで！悪くねえって。たださ、ほら、祐也が目立つからなあ」
「…俺が霞むって？」

「そうそう。祐也ってタツパあるし迫力あるしなあ」
「だな」

「だから、隣にいと霞んじやうだね。俺もお前も」

ケラケラと笑いながら話すシゲは、なんだか楽しそうだ。
話している内容は、結構シニールだと思っけど…。

二人は食堂に着く。

皆2限の授業に向かっているのだろう。

食堂はガラガラだった。

俺は2限を取っていないし、シゲも本来なら今日は授業が無いはず
なのだが

課題をやると言って大学に足を運んだらしい。

食堂の隅陣取ると、缶コーヒ一片手にのんびりタバコに火をつける。

ゆっくり上っていく煙に目をやる。

「なあ、雅い」

ふと、シゲが口を開く。

「ん？」

「今日、バイト？」

「あゝ…うん。10時からラストまでな。なんで？」

俺のバイト先は居酒屋のチェーン店。

昼はレストランとして開店しているので、授業が無い日は日中もバイトに入っている。

それでも出来るだけ夜のシフトを入れるのは、給料が良いから。

いくら家賃折半・光熱費も折半といったところで

都内アパートの家賃を支払うにはそれなりに稼がないといけない。

実家からの仕送りも断っているので、完全に自分のお金でやりくりをしている。

その為、祐也も夜でも働けるように24時間のレンタルビデオショップでバイトをしている。

夜でも動けるのは学生の特権だろう。

「8時くらいに店行く予定だからさ」

「ふうん。じゃあ店長に言っておいてやるよ。何かサービスしてくれるだろ」

「サンキュ！助かるわ」

時々、友人がこうやってバイト先に飲みに来る。

事前に店に言っておけば、時折サービスしてくれるのだ。

「あ、たぶん祐也も来るぜ」

「祐也も？あいつデートだろ？」

「そうそう。その彼女と、彼女が友達連れてくるっていつからさ」

「…あゝコンパすんのね」

俺はゆつくりとタバコの煙を吐きながら呟く。

正直、見たくは無い。

祐也に甘える女性。

付き合っているんだから、それなりにイチャついたりもするんだろう。

誰がそんな光景を見たいものか…

「雅も祐也の彼女、見てみるよ？美人だぜ。目の保養！」

「…ん…忙しくなかったらな」

なんて、言い訳。

できる事なら見たくない。

何度かそういう光景は見たことがあるが（どれも違う女なのけど）やはり見た後は気分が悪い。

今日のバイトに少々気を重くしたせいかな、いつもよりタバコの味が苦い気がした。

- 3 - (前書き)

間隔があいてしまい申し訳ないです。
話の流れにはそんなに大きな変化はないですね

「お疲れさま〜っす」

俺はいつものように、従業員入り口からバックルームへ入る。

すでに同じシフトのバイトが準備を始めている。

「ねえ、鴨井くんたち来てるよ〜」

制服を着た雪下早百合ゆきしたさゆりが俺の元へ駆けて来る。

「ああ、飲み会って言ってたな」

「そうなんだ〜。なんだか美人な子連れてたよ。友達もきれいなの
っ」

早百合はコロコロと笑いながら話す。

長い栗色の髪を結び上げ、きれいなメイクをしている早百合も
それなりに美人の部類に入る。

こざっぱりした性格のせいか、息が合い
同じシフトに入ると、仕事もやりやすかった。

「シゲも来てるだろ？」

「うん、来てるよ」

祐也やシゲは、結構店を利用するせいか、バイト仲間の間でも知った顔だった。

「店長に話しておいたんだけど、つまみあたりサービスしておいて
「了解。適当に出しておくね。」

そう言つて、先に早百合は仕事に出る。
俺も着替えを済ませ、フロアに向かった。

（見たくないな…）

そうは思ふけれど、やはり顔を出さないわけにはいかない。

8時からと言つていたので、10時を回った今はすでに解散の方向に向かつているのだろうか…

（仕方ないな）

意を決する。

何度も、同じ光景は見てきた。

今までだって平気だったんだから、今回だって平気。

自分にそう言い聞かせながら、祐也たちがいるテーブルの方へ向かう。

遠くからでも、祐也たちがいる場所が分かる。

自然と目が祐也を見つける。

そんな自分が情けない。

「ども」

小さく会釈しながら、テーブルへ近づく。

メンバーは6人。

見事なまでに男3、女3の合コン状態。

一番奥に座っている女性が祐也の現彼女だろう。

隣に座る祐也にもたれる顔は、少し赤い。

いやらしくない金のロングに、軽くウェーブがかかっている。

お酒のせいでトロンとしたその目つきは、少し潤んでいて

男ならノックアウトされてしまう。

細い腕、長い指先。きれいにアートされたネイル。

イヤというほど、女を見せ付けられる。

そしてその女性に肩を貸している祐也はタバコに口をつけている。

祐也の隣にはシゲ。

こっちも完全にお酒が入っている。

シゲの向かいには、祐也の彼女の友達。

ショートヘアの似合う、さっぱりめの女性。

その隣には、シゲの友人。

何度か学内で会った事がある。

そして、一番奥にはもう一人女性。

どこかのお嬢様ではないだろうか？と思うほどのおとなしい雰囲気。

「お、みやびい」

手を上げるシゲのそれっはかなり怪しい。

「こいつ、雅っていうの。ここのバイト。で、さっきサービスで
揚げ物類くれたっしょ？こいつのおかげ」

さも、自分の手柄だと言わんばかりにシゲが自慢げに話す。

「わあ、ありがとう！」

ショートカットの女性が笑顔で言う。

ふと、その声に反応したかのように、祐也に頭を預けていた女性が顔を上げた。

「…みやび…くん？」

「はい？」

「あなたが…ミヤくんなの？」

いきなり名前を呼ばれ、困惑した。

「ミヤって…ああ、もしかして祐也が何か言いました？」

ミヤと呼ぶのは祐也しかない。

高校時代の友人ですらも、ミヤとは呼ばないから。

「ふふ、正解。祐也と一緒に住んでるんでしょ？」

「ええ…まあ…」

楽しそうに笑う彼女に、雅は祐也に鋭い視線を投げる。

（一体、何を話したんだよ！）

しかし、その視線に肩をひよいとあげただけで、祐也は何も言わない。

「大丈夫よお。変な話を聞いたわけじゃないから。祐也の部屋に行きたいって言ったら

”ミヤがいるからダメだ”って言われちゃっただけ。」

「はあ……」

なんと答えればいいのか分からない。

「あゝと、じゃあ俺、仕事戻りますんで。ごめっくり
そそくさと、俺はテーブルを後にした。」

なんだかドツと疲れた気分だった。

今夜の店は、やたらと混んでいた。

オーダーがひっきりなしに入り、休む暇など無いほど動く。

閉店2時のこの店で、ようやく落ち着きが見え始めたのは1時半過ぎ…

この頃になると、皆手持ちの酒だけで会話しているし大半は酔って騒いでるだけ。

（なんか…疲れた…）

俺は店のゴミを纏め、外のゴミ置き場に運ぶ。

賑やかな店内から、夜中の静けさに移動しただけで体も精神的にもドツと疲れを感じた。

（早く帰って寝てえ…）

ぼんやりと思いながら、肩を回す。

すると、いきなり背後からその肩を掴まれる。

「うわっ…！」

驚いて振り向くと、そこには祐也が立っていた。

「ゆう…や…。驚いた」

「わり」

「なんだよ。まだ飲んでたのか？」

予約時間から、かれこれ五時間くらいはいることになる。

忙しくてフロアを見ることもあまり無かったけど、とうに帰ったものだと思い込んでいた。

「なんだか盛り上がってな。シゲなんて、まだ何か語ってる」

「あはは。そりやご愁傷様。で、お前は外で何してんの？彼女は？もしかして、2人で抜けようって？」

俺は周囲を見渡す

しかし、路地裏のこんなところに彼女連れてくる方がおかしいってもんか。

「美結はまだ店。寝てるよ」

「みゆ？って…彼女の名前なんだ」

聞き慣れない名前に、それが彼女の事だと気付くのに少し時間がかかる。

「紹介してなかったっけ？」

「いちいちおまえの彼女を紹介されてたら、名前覚えきれないよ」

「そうか？」

「そう。で、その美結ちゃんは寝かしたままで良いのか？あんな美人、目を離したらシゲあたりが危ないんじゃない？」

「別に…そうならそれで、いいんじゃないかねえの？」

祐也は苦笑しながら、タバコに火をつける。

相変わらず執着心が無い

昔から変わらない。

別れた彼女の事を一度も追うような真似もしなかったし
後を引くこともしなかった。

自分から告白した事もないだろうから、本気の恋愛はしてことが無いのかもしれない。

「タバコ、吸いにきたのか？」

「タバコと外の空気」

祐也の言葉に、なるほどと思う

いつまでも籠もってるのもイヤだろう

「もうすぐ閉店だから、皆起こしておけよ？」

「ああ」

「じゃ、俺は店に戻るから」

そう言っただけで祐也の肩を叩くと、再び店への扉に手をかけた。

その時…

「ミヤ」

「ん？」

「キスして」

祐也の言葉に、俺は振り返る

壁にもたれたまま、タバコをくわえ、こちらを見つめる祐也

今まで、何度となくキスはしたけれど

こうして言葉に出して求められることは無かった。

「何言ってるんだよ」

「キス。いつもしてんだろ？」

さすがにそう言われると何も言えない

「ま…そうだけどさ。どうせ美結ちゃんとすんだろ？俺としなくても
もいいじゃん」

そう…

どうせ、この後こいつは美結ちゃんと過ごす

帰らないって言ってたんだから、それなりの事はするんだろう
キスしたいなら、美結ちゃんにいくらでもすればいい

「つとに…酔っ払いは…」

「じゃあ、帰る。美結んとは行かねー。それならキスするか？」

「…はあ？」

「今日ラストまでだろ？終わりまで待つから、一緒に帰ろうぜ」

こいつは…何を言ってるんだ？

時々、突拍子もない事を言うからついていけない
気紛れにも程がある

「だから、しろよ」

そう言っで近付いてくる祐也の顔を見上げた。

全く…ワガママ過ぎるだろ

気分屋で、その場の感情だけで物事を決める
先のことなんか考えてやしない

- - - - ガキかよ…

おもちゃ欲しがるガキと同じだ

「ミヤ、聞いているのか？」

「聞いているよ」

「じゃ、しろよ」

「…駄々こねかよ」

「うるせ」

「仕方ねえな」

そう言っで笑うと、俺は軽くキスをする。

その瞬間…彼女のものだろうと思われる香りが鼻を突いた

仕事が上がれたのは3時近かった。

バイトの皆で店を出る。

「あれ？祐也くん！」

声を上げたのは早百合だった。

「彼女は？皆帰っちゃったの？」

早百合が駆け寄ると、祐也は寄りかかっていたガードレールから体を上げた。

「よ、早百合ちゃん。俺はミヤ待ちしてんだ」

「そうなんだ」

俺は2人が談笑しているとくに近寄る。

俺に気づいた祐也は「おつかれ」と片手をあげて言った。

「おつかれ。しかし…まじ、ほんとに待ってたのかよ」

「まあな」

「じゃあ帰るか。皆、おつかれ」

俺は振り返り、バイト仲間に手を振る。

向こうも「おつかれ」「じゃあな」と口々に挨拶する。

「じゃあ私も行くね、お疲れ様あ」

早百合も駆け足でバイト仲間に混じって帰って行った。

「さて、行くか」

残された祐也は自宅方向へ歩き出す。

俺もそれに続いた。

「彼女、どうした？怒ってなかったのか？」

さすがに、何て言って彼女を振り切ったのか気になり、祐也の背に問いかけた。

「あゝ、あのまま寝てたからタクシー乗せて帰した。真明が送っていくって」

まごあき
真明…とは、シゲの友人だろう。

俺の知らない名前が、こうやっていつも出てくる。

「ふうん。その真明くんが彼女狙ってたらどうすんの？」

「別に。それに狙ってないと思うし…」

「じゃあ、別の子狙いか。そりゃまあ…真明くんもご愁傷様だな」

自分の目当ての子を送れず、祐也の彼女を送る事になるうとは…

真明が誰狙いかは知らないが、なんだかかわいそうではある。

「そついや祐也、明日バイトだろ？」

「おう」

「悪いんだけど、上がりついでに何かDVDでも借りてきて。明後日、休みだから見ようと思ってさ」

祐也のバイト先はレンタルビデオ店。

新作も真っ先に借りてきて貰えるから重宝してる。

「何系？AV？」

「なんでAVだよ。AVじゃなくて…。適当に。コメディあたりで「りょーかい」

他愛のない話をしてると、あつという間にアパートに着く。

なんだか、こうして祐也とともに顔を合わせるのは久しぶりかも

しれない。

それだけ連日すれ違いの日々。
だけど、きっと祐也はそれすら気付いてない。

「祐也、風呂入っちまえよ」

俺はテレビのスイッチを入れながら祐也に話しかける。

祐也は荷物を放り、俺に向き直った。

「ミヤ、先に入れば？」

「俺は後で良い。先に祐也入れよ。お前の匂い、気持ち悪い」

「…あのなあ、何それ」

俺の言葉に怪訝そうに祐也が呟く。

その声に俺は苦笑した。

「お前のタバコの匂いと、彼女の香水…相性悪い。何か妙な匂いになってるからってこと」

ウソではない…

ウソではないが…本心は彼女の香りを漂わせてる事に気分が悪い。

なぜなら祐也からするタバコの香りは…嫌いではないからだ。

「部屋にその匂い付くの勘弁」

「わかんねえな…」

裕也は自分の服を嗅いでみたりしている。

「自分の匂いなんてわからねえだろ。いいから…」

早く行け…と言おうとした瞬間…

俺はその嫌な匂いに包まれた。

いつものように、柔らかく抱きしめるのとは違う

祐也は力任せに俺を抱き寄せ、そのままキスをしてくる。

高校から続く、軽いものとも違う、奪うような…痛々しい口付け…

「ちよっ…ゆっっ…や！」

祐也の体重を支えきれず、俺は床へ倒れそうになる。

かろうじて、祐也が俺を抱き締めてることで立っていられる感じ。

「ゆっや！まっ…て…」

口内に忍び込んでくる舌

角度を変え、何度もそれは俺の口の中に滑り込んでくる。

初めての感覚…

女と付き合った時ですら、こんなに激しく求められた事はない。

「ん…は…っあ」

呼吸を忘れて、酸欠になりそうだ

「ゆうつ…や…！」

ふと、俺に重なる祐也の向こう側の姿見が視界に入る

そこに映る自分の姿

必死に祐也にしがみつき、混乱した自分の姿

その中に、貪欲に彼を欲する自分が映し出されたようで……

（や…べっ！）

「祐也！祐也！」

彼を引き剥がそうと、本気で奴の胸元を拳で殴る。

「って！」

その痛みでようやく祐也の腕の力が抜けた。
瞬間を見計らい、俺は腕から逃げる。

「いてえな」

「あつたりまえだ！いきなり…何すんだっ」

ズルズルと座り込む俺は、それでも負けないように奴を睨み付ける

そうしなければ、迫力負けしてしまいそうで…

「おま…っ…まだ酔ってんのかよ」

整わない呼吸

上がる肩

「そんなに欲求不満なら、彼女んとこ行きや良かっただろうがっ」

自分にまで、先ほどの香水が移ったようで気持ち悪い

「……別に…そんなんじゃねえよ」

「じゃあ、どういつつもりだよっ」

「さあな。今までの延長だろ」

そう言い放ち、祐也はバスルームへ消えた。

静寂が部屋に戻る

俺の荒い呼吸だけが、部屋に木霊した。

（マジ…かよ…）

俺はふと、目の前の鏡を見つめた。

髪もボサボサ。

今にも泣き出しそうな自分の姿に、情けなくなる。

しかも…

（勘弁してくれ…）

不覚にも、反応を示した下半身

（男の性だろ…）

一人で言い訳するだけ虚しくなる

無我夢中で受け止めたキス

姿見に映る自分が浅ましくて冷静になった瞬間に…反応してしまった

（変態かよ…俺）

羞恥プレイなんて、ガラじゃねえだろ…

ふうつと深いため息をつく。

バスルームから聞こえてくるシャワーの音に、俺は顔を上げた。

一体どんなつもりだったのか…

欲求不満になるほど女に不自由してるはずがない。

今夜だって、本当なら彼女のところに泊まりだったはずなんだから…。彼女のところに行かず、帰ると決めたのは本人だ。

なら何故？

（バレたかな？）

今まで隠していた恋心…

それが顔を出し、あいつを求めるような物欲しそうな顔をしていたのだろうか。

混乱した頭を冷静にしようとタバコに手を伸ばす。

しかし、切らしていたのを忘れていた。

こんな時に限って買い置きもない。
コンビニに買いに行くのも面倒だ。

仕方が無く、祐也のタバコに手を伸ばした。
自分のが無くなると時々貰う。
自分とは違う銘柄

祐也の方が重い。

少し苦みのある味に、ようやく一息ついた気分になった。

「ミヤ、風呂いいぞ」

俺がようやく冷静になった頃、祐也が何事も無かったようにバスルームから出てきた。

それもそうか…

『今までの延長だろ』

奴はそう言ってた。

意識するようなものでもない。

意味を問いただす必要もない。

ただの気紛れ…

高校の時も、気まぐれにキスした。

それと同じ事

考え込んでいる方が馬鹿らしい

こいつにとって、キスなんて意味が無いんだ

「ん。入る。そだ、タバコ貰ったから」

「ああ。お前の切らしたの？」

「うん。買い置きし忘れた。明日買ってくるわ」

そう言っつて、祐也の横をすり抜ける。

俺も何も無かったかのように振舞うしかない

今はもう、イヤな香りは消えていた。

~~~~~

翌朝…

「う…ん…」

俺は眩しく射す太陽の光で目が覚めた。

バイトがラストまでの翌日は、授業は昼からか休みの日にしている。だから、体に疲れが残ることはあまりないのだが…

（頭…いてえ）

どうにも昨日（日付は越えていたから今日になるのか？）の出来事が頭から離れず  
しまいには、思い出せば体が反応しそうになる。

（うっ…休みてえ…）

非現実的な事を思いながら、ベッドの中で寝返りをうつ。  
何度かそうしていると…

「ミヤッ！起きてるのか？」

ドアをノックする音と同時に祐也の声がした。

どうやら、彼は既に起きているらしい。

今日は同じ昼過ぎからの授業。

早く起きた方が昼飯を作るルール。

あの様子だと既に昼飯は出来上がっているのだろう。

（元気だな…）

いろいろ考えていた自分がいけないのだが祐也のその神経が羨まし

くなる。

いや、気にしてなきゃ何とも思わないのが普通なんだろうけども…

「起きてる。今行く」

重い体を起こし、ドアに向かって意思表示をしておくとベッドから降りた。

その瞬間、微かなめまいに襲われる。

(っ…！)

一瞬動きが止まる。

頭を押さえたまま、ジツとしていると程なくして収まった。

(疲れて…るのかな…俺)

ふうつと思わずため息が出た。

もしかしたら限界なのだろうか…

自分の恋心を隠し、ひたすらに笑顔を作るのも…



一緒にいる空間はとても好きだ  
好きな奴と一緒にいられて、イヤな訳がない  
しかし、向こうに相手がいるとき…  
自然に振る舞うほど難しいものはないと思う

この気持ちに気付かれるのは困るが、あまりに無神経だと腹が立つ。  
矛盾した感情

それでも『別々に住もう』とも言えない  
今の環境を手放す勇気すらない

（覚悟：したんだけどな）

俺は自分の頬をパチンと叩くと、リビングへ出た。

\*\*\*

のろのろと部屋を出れば、リビングには良い香りが漂っていた。

「やっと起きてきたか」  
ベランダでタバコを吸っていた祐也が俺に気付いて部屋に戻ってくる。

テーブルにはパスタが湯気を立てていて、朝食を逃した腹が空腹を訴えた。

「先食べて良かったのに…」

「一服した後食べようと思ってたんだよ。そしたらお前が起きてきた」

「あそ」

「顔洗って来いよ」

「うん」

もそもそと洗面所へ移動する。

鏡に映る自分の顔は酷いものだった。

いかにも寝不足ですと言った表情。

顔色が良いとも言えない。

（俺が女なら、今日は学校は休むな）

あまり自分の身なりで気にはしないが、正直人前に出たいと思うような状態ではない事は確かだった。

しかし、それも諦める。

休む理由も無いし、祐也に勘ぐられるのも御免だ。

一通りの準備をし、リビングへ戻ると既にコーヒーも用意されていた。

「お、準備できてるな」

「お前が起きるの遅いんだよ」

呆れた色を含んだ声に、俺は苦笑いを溢す。

「…昨日はラストまでだったし、忙しかったの知ってるだろ？」

こうして軽い言い合いも出来るのは、自然に見えるだろう。

裕也と向かい合いに座り、昼食を食べ始めた。

テレビでは昼のニュース。

天気予報なんかもやっているが、あまり耳に入らない。

「祐也、今日バイト何時まで？」

「ん？今日は6時から10時。晩飯、コンビニなんかで買ってくるよ」

「了解」

夕食が一緒になる時は、どちらかが作っていたりする。

食費節約のためもある。

しかし、ずれる時は一人分を作るのも億劫で、外食で済ませてしま  
うのだが。

今日はどうやら夕食は別々のようだ。

顔を合わせないことに、微かな安心を覚えた。

「食い終わったら行くぞ」

すでに食事を終えた祐也が立ち上がる。

「はい」

俺も少し速度を上げて食事に専念することにした。

重い体を引きずりながら、それでも祐也と大学へ行った。  
とりあえず出席だけはしておこう、と思ったから。

「ミヤちゃん！」

連絡用の掲示板で休講などの確認をしていると、いきなり聞き慣れない呼び名で呼ばれた。

俺をミヤと呼ぶのは祐也だけで、まして『ちゃん』付けで呼ばれたことなんてない。

「…誰だ？」

身体のだるさから声の不機嫌にはなるが、それでも返事をする。  
当然隣にいた祐也も声のする方へ振り返った。

「ミヤちゃん、昼過ぎからなんだ？」

そう言つて、手を振ってくるのは、確か昨日、祐也たちの飲み会にいた…

「”真明”くん？」

ほとんど印象に残ってなかったが、かろうじて記憶を辿る。

とは言ったものの、ちゃんと名前を名乗ったわけじゃないから仕方がない。

「あれ、名前知ってたんだ？」

彼は楽しそうに笑う。

「俺、山口真明。ここの英文科に通ってるんだ。鴨井に聞いてない？」

「いや…昨日の話はあんま…」

「そ。シゲとは幼なじみなんだ。俺のが一つ上だけだね」

「じゃあ三回生？」

「うん。よろしく」

物腰柔らかな真明は、祐也とは逆の雰囲気だが女受けが良さそうな顔立ちをしていた。

身長も高い。

なんとなく落ち着いた風貌は、俺と一つしか違うとは思えなかった。二つ・三つ違ってもおかしくはない気がする。

そんな事をぼんやりと俺は思いながら、山口真明サンを見上げていた。

「鴨井、昨夜：美結ちゃん怒ってたぞ」

真明サンは俺の視線にはチラリと笑みを返し、祐也に話しかける。

「宥めるの大変だったんだからな。もう少し穏便にすませられないのかい？」

「…悪かったな」

裕也は口ではそう言うが…

きつと悪いなんて思ってたない。

長い付き合いで分かる。

後に残された人間が、ややこしいことを背負うだけなのだ。

「フォローしておけよ？」

真明サンはそう言うが、祐也の反応はイマイチ。

面倒だとも思っているのだろう。

その空気を真明サンは感じ取ったらしい。

「じゃあ、そういう事だから。ミヤちゃん、またね」  
彼は祐也の態度を深く言及するわけでもなく、爽やかに去っていった。

…しかし…どうにかならないのか…

俺は思わず深いため息をついた。

隣の祐也からの不機嫌オーラが痛い。

自業自得だつてのに…

真明サンに感謝こそしても、ここはヤツがキレる場ではない。

「祐也、真明…さんの言うとおり、フォローしておけよ?」

一応諫めてみる。

「いらねえよ」

あっさり切り捨てられる

「あのなあ…彼女に振られるぞ」

「別に。どうでもいい」

まただ…

執着が無いのは構わないが、こうやって誠意すら見せないのはどうなんだ。

いざこざ起こさず、よくここまでできたものだと思う。  
いつか、殺傷事件でも起きるんじゃないのか？

「ったく…祐也、少しは大人になれよ？いつか、本気で誰かを好きになった時に困るのはお前だからな」  
「そう…だな」

一瞬…祐也の瞳が淋しそうに伏せられる。

(……?)

それは見間違えかと思うほど一瞬だった。

次に見たときは、いつもの祐也で…

「授業、行くぞ」

そう言っただ教室に行ってしまった。

ぼんやりした頭で見た、一瞬の幻か…

長く一緒にいても、分からないこともある。

例えば、彼の中に起きている変化とか

例えば、自分の周囲を取り巻く人間関係とか

常に同じ事などなくて

ともすれば、きっと見逃してしまつような些細な変化が、もしかしたら祐也の中にもあるのかもしれない

ふと、祐也との距離を感じて俺は涙腺が緩みそうになった。



照明を落とした部屋に、静かにラジオから流れる音楽

（誰の曲だったっけかな）

有名なラブソング…。

だけど、曲名は思い出せない。

それでも耳に心地良い…。

俺は何本目かのタバコに火をつけた。

授業が終わり、祐也はそのままバイトに行った。

いつもなら、シゲあたりと遊んで帰る俺も今日はまっすぐ部屋に戻った。

体のだるさは相変わらず…。

風邪かとも思っただけで熱を計ったが、至って平熱。

しかし、食事をする気になれず買い置きビールとコンビニのパンを一口食べただけで後はずっとぼんやりと座り込んでいた

テレビも鬱陶しく、ラジオで静寂をやり過ごす。

（たるいなあ…）

幸い、明日は休みだ。

祐也が何かしらDVDを借りてきてくれるだろうから、それ見て過ごせば良い。

1日、ぼーっと過ごしていたら、体も復活するだろう。

他人事のように考えていると、テーブルに置かれた携帯に着信を知らせる音楽が鳴る。

（誰だ？）

携帯を見ると、見知らぬ携帯番号。

バイト先の誰かだろうか…？

「はい」

一応、ダルさを感じさせない声で反応する。

『もしもし？』

「どちらさん？」

『真明です』

名乗られた名前は予想もしなかった相手

「真明さん？」

『最初は”くん”付けが、今度は”さん”になったんだ？』

楽しそうに話す声に、俺は気後れする。

「すいません…。まさか年上だと思わなかったし…」

『いいよ。』さん”もくすぐったいから、呼び捨てにしてくれないかな?』

クスクスと小さく笑う声がする。

「はあ…。でも、なんで俺の携帯…」

『ごめんね。シゲから聞いた。鴨井に用事だったんだけど連絡つかなくてね。ミヤちゃんに連絡させてもらったんだ』

なるほど…

あいつなら、携帯に出ないとかありえるもんな  
妙に納得してしまったが、さすがにそうは言えない。

「あゝ、あいつは今日バイトだから…」

無難な、でも真実を告げる。

『そつか。…うん、でも好都合かも…』

そう言われて、少しイヤな予感がした。

「…もしかして…美結ちゃん…何か言ってたんですか?」

祐也の彼女の話で聞かれたくない事なら、裕也はいない方が良い。

しかし、真明の口からは予想と違う言葉が出てきた。

『うん…そうなんだけど。好都合なのはミヤちゃんに電話する口実が出来たことかな』

「はい? ……えっと…?」

思わず反応した声が微妙に裏返る。

受け答えが難しい事を言われた気がする…んだけど…?

「口実って？」

『俺はね、ミヤちゃんとお近づきになりたいなあって思ってるんだ』  
「俺と？」

益々意味が分からない

『そう。ミヤちゃんといろいろ話してみたくてね』

「あの…俺、面白いネタとか持ってないんですけど…シゲか祐也が何か言いました？」

俺から聞きたい話なんて無いだろうし…

何が面白くて、俺と話したいのか…全く皆目検討もつかない。

『そついうんじゃないんだけど…まあ、いいか』

う…。なんだか一人で納得されても困る

「あの…」

『あ、鴨井に伝言しておいともらえるかな』

突然話題がすり替わる

なんだか肩透かしをくらった気分

「なんででしょう？」

『美結ちゃんかね、祐也と話したいから電話かメールよろしくって』  
「分かりました」

『うん、悪いけど伝えておいてね』

こついう伝言は高校の時からあった

何故か俺が窓口になる

仕方がないと思う。

向こうは必死だ。

自分の言葉を伝えるためには手段を選ばない。

おかげで巻き込まれるこっちは堪らない

「祐也に伝えるのはそれだけでいいんですか？

『うん。ところで、ミヤちゃんさ。今彼女とかいないんだって？』

突然の話の切り替わりように、何も言葉が出てこない

なんだか、唐突な人だ…

「いない、ですけど」

『ごめんね、いきなり。この間シゲが言ってたからさ。でも彼女いないんだったら、気兼ねなく外出とか出来るよね？』

「あゝ…まあ…。そうっすね」

祐也と住んでいても、お互い自分のペースは崩さない。

だからこそ、祐也は女のところに行くのだろうし、自分も好きに遊びに出かける。

『じゃあさ、今度俺と出かけない？』

「真明…と？」

『そ。イヤ？』

イヤかと聞かれても…

俺にしたら、知らない人間。

この間の飲み会に参加したわけでもないし、何か交流があったわけでもない

何故、そんな相手と出かけるのか…

イヤも何も、単にどう返事すりゃいいか困るだけだ。

「あの…出かけるって？」

『行きたいところ無い？車あるから遠出も出来るよ』

「いや…あのですね。シゲ達も誘ってって事です…よね？」

どうにも話についていけない

『出来れば2人がいいかな。デートみたいだしね。ミヤちゃんの話もゆっくり聞きたいし』

だから、何故2人なんだ…

全く意図がつかめない

だけど…

「別に…構わないですけど……俺の話してもつまらないんじゃない？それに、この間の飲み会で誰か狙ってたんでしょ？その彼女誘えばいいんじゃないんですか？」

『だからミヤちゃんに興味があるんだよ』

「……………」

『ミヤちゃんの事知りたいし、ミヤちゃんの話も聞きたい。一目惚れだからね』

（はあ？）

一目惚れ？

今、一目惚れと言ったか？

『びつくりした？』

無言の俺に尋ねる声

びつくりした

びつくりしたけど…

「俺…男ですけど？」

『知ってるよ。女装は似合うと思うけどね。女の子には見えないよ』

今、さくつと変な事を言われたような気がするけれど…  
それよりも…

「……一目惚れって…」

『人を好きになるって理屈じゃないよね』

真明の言葉が胸に突き刺さる

なぜなら、俺もその感覚を知っているからだ

男とか女とか…

いつからとか、どうして好きなのかとか

理屈じゃない

ただ…その人が好き

祐也が…好き



「…あのっ」

『また連絡するよ。驚かせてごめんね。おやすみ』  
「…はい」

電話が切れると、再び部屋が静かになる。

ラジオからの音楽はいつの間にかニュースに変わっていた。

ズルズルとその場に座り込む。  
昼間より体が重くなつた気がした。

無性に祐也に会いたくなる  
恋しくなる

真明の言葉が…まるで自分の事を言っているようで胸が痛い。

「…っっ」

自然と頬に涙が伝う

何がなんだか混乱していた。  
どうすれば良いのか…  
自分の気持ちの整理がつかない…

優しい真明の言葉にリンクする自分の気持ち  
見えない祐也の心に、どうしようもないんだと納得させようとする  
自分がいて…

「…なんっ…なんだよっ」

誰に対してもなく毒を吐く

何かを言葉にしなければ、重くなって行く気持ちに耐え切れなくな  
ってしまいそうで

その時、部屋の鍵が開く音がした。

（祐也…！）

バイトが終わったのだろう。

部屋の扉が開く。

「ミヤ？」

間接照明だけが照らす部屋に、祐也が呼びかける。

「ミヤ？…って、お前…どうしたんだよ！」

まだ座り込んでる俺を見つけ、祐也は駆け寄って来た。

「具合でも悪いのか？」

「ゆっ…やっ」

泣けば変に思われる  
余計な心配をかける

分かってはいても、流れる涙は止まってはくれない

「わり…っ」

裕也から顔を逸らす。

泣いてるのはバレているが、それでも見られるのは気持ちが良いものではない。

「何かあったのか？」

心配そうに祐也は俺の前に屈む。

俺の顔を覗き込もうとする祐也から、逃れたかった。

「…ミヤ？」

「ごめん。ちょっと情緒不安定…」

なんとか心配かけまいとするが、祐也は俺の前からは去ってくれない。

それどころか…

「……具合も悪いんだろ？」

「え？」

「今朝、顔色悪かったしな」

「…気付いてた？」

俺は思わず顔を上げた。

気付かれてないと思ったのに…  
彼には気付かれていた…

「そりゃ、気付くだろ。何年の付き合いだと思ってんだ。でもそれだけじゃないんだろ？何があった？」

「何も……」

「嘘つくなよ」

「……」

時々、こいつは何もかも見透かしているんじゃないかと思ってしま  
う。

間接照明の薄暗い灯りの中、至近距離にいる祐也の表情は、この間  
見た時と同じ辛そうな……何かを堪える顔。

心配かけているのは俺なのに……

不謹慎にも、その顔をキレイだと思ってしまった。

灯りに透ける茶色の髪も、整った目鼻立ちも……

全部、俺のものだったら良いのに……

「……………」

俺は無言のまま、祐也の頬に手を伸ばす。

そのまま顔にかかった髪をかき上げる。  
サラリとした感触が気持ちよい。

「ミヤ？」

「ごめん。祐也」

俺は祐也から手を離し、自分の頭を掻き毟った。

「何でも、ないんだ。さつきさ、真明から電話があつて…」

「真明から？何であいつがお前の携帯知ってるんだよ」

「シゲから聞いたんだって。お前に話したかったらしいんだけど、繋がらないって」

苦笑しながら祐也を見上げる。

「着信、気付かなかったのか？」

「気付いたけど折り返さなかっただけ」

「あんな、折り返せよ。だから俺のところに皆伝言頼むんだろ」

…本当に、周囲に無関心だな。

言葉に出さず、思う。

「彼女に電話してやれよ。何か話あるんだってよ」

「…それが伝言か？」

「そう。俺が窓口になつてやったんだよ」

「それだけで…お前こんなになつてんのかよ」

今度は祐也の手が俺の頬に触れる。

ようやく止まった涙の跡をなぞるように指を這わす。

「それだけじゃないだろ？あいつに何言われたんだよ」

問いただす祐也の口調に、わずかに怒気が含まれているのは気のせいだろうか。

頬に触れられた手は、そのままに…

ただ、祐也の視線だけが鋭くなる。

いつもなら納得して引き下がるのに、今日は何か様子がおかしい。

「言えよ」

有無を言わさない。

「言えよ。ミヤ」

「……………真明に…一緒に出かけようって言われた」

（何を正直に話しているんだろう）

詳しく話すような内容じゃない。

けれど、今の祐也には話さなければいけない気がして…

「俺に興味があるって。一目ぼれだってさ…」

「…なんだって？」

一層険しくなる表情

そりゃそうだろう…

女付き合いが派手なこいつにしたら、男が男に恋愛するなんて想像できないのかもしれない

けれど、それは俺の気持ちを拒絶したのと同じ事…

だから自分で予防線を張る

「笑っちゃうよな…。俺、女に見えないんだぜ？なのに…惚れたなんてさ。しかもどこが良いんだかさっぱりだよ。第一印象だって良いとは思わないし…」

「……………」

「だからさ、ちょっと混乱しちゃっただけ。少し体調も良くなかったしさ…。それで情緒不安定になっただけだから…。ほんと、心配する必要ないんだ」

（だから…もう、そんなに心配そうな顔するなよ）

俺は祐也の顔を見たくなくて、少しづつ俯く。

しかし、祐也の手がそれを許さなかった。

頬に添えられていた手は、俺の顎にかかり顔を持ち上げられる。

「……………！ゆう…や？」

祐也と目が合う。

その目に俺は恐怖を覚えた。

「ゆうつ…や！」

「ふざけんなよ？」

「……………え？」



聞いたこともない程、低い声。  
明らかに怒りの感情を露にした瞳。

「ふざけんなって言ったんだ。何と一緒に出かけよう、だ。一目ぼれだど？ムカつくんだよ。何なんだよ、それ」

「…祐也…？」

こいつが何に対して怒っているのか分からずただ戸惑うだけ。

「断ったんだろうな？ミヤ」

「…え？」

「その誘いだよ。断ったんだろうな？」

「いや…その…なんだか俺…混乱しちゃって…でも…OKは…した」

まさか、その時は告白されるとは思わなかったから。  
ただ、友人として遊びに行くだけかと思っていた。

しかし、その瞬間、俺は祐也に襟首を締め上げられた。

「…っ！…！ゆう…やつ…ちよっ」

「お前もあいつの事好きなのかよ。だからOKしたのか？」

「…やつ…ちがつ…待て…よ、祐也っ」

苦しくて上手く喋れない

「何が違うんだよ。好きだって言われて…二人で出かける約束して…何が違うんだか言ってみろよ」

祐也の手に、力が籠る。

「それとも、欲求不満か？男でも良いって…あいつに優しく言われたから、それでも良いってことか？」

「…ちがつ…って…離せ……よっ」

俺は首元にある祐也の手を掴み、そして力いっぱい引き剥がした。

「げほっ…………っ…っ…ってえな…」

ようやく酸素が入り込む感じに、俺は肩で呼吸する。

しかし、祐也にはそんな事はどうでもいいらしい。

「ミヤ、どういっつもりか言えよ」

「どういっつて…どうもしねえよ。OKしたのは告られる前だ。ダチと出かけるのに、断る理由なんかねえだろ！」

「じゃあ、告られた後だったらどうなんだよ」

俺の反論に、ようやく冷静に人の話を聞く気になったらしい。

「告られた後の誘いなら断ったよ。お前みたいに、好きだって言われて誰彼付き合う気はないからな」

「じゃあ、きつちりと断わっておけよ？」

「…そのつもりだよ。大体なんだよ。…お前がそんなに怒り狂うことじゃねえだろ」

今度は俺がにらみつける。

祐也の鋭い眼光に負けそうになるから…

「お前だつて、あちこち遊び歩いてるじゃねえか。何が違うんだよ」

「バカか、お前は。いい加減、俺だつて限界なんだよ」

「…バカつて…あのなっ。何が限界だよ。俺が殺されかけた理由に…なんのかよ」

今まで見たことない程、冷静さを欠いた祐也。

一体なのがそれ程までにこいつを駆り立てたのか検討もつかない。

「四年間、キスだけなんて、俺もなかなか純情だろってことだよ」  
そう言つて、今度は祐也が脱力したように座り込み、なんとも情けないような…全く違う顔を見せる。

「は？純情？」

「いい加減気付よ？戯れに四年間キスだけしてたと本気で思つか？  
下心くらいあるぞ」

祐也の視線が柔らかくなる。

「そろそろ限界だ。いつまでもキスだけで満足出来る男じゃないかな」

少し自嘲気味に笑う祐也を俺は見たことがない。

一体……こいつは何を言ってるんだ？

四年間キスだけの関係って…

それ………

「俺とのこと…言ってるのか？」

間抜けだと、自分でも思う。

それでも、俺の自惚れかもしれない不安がある。

「お前は俺に四年間付き合いが続いてる人間を他に知ってるのか？」  
からかうような口調に、何かを吹っ切れた感じを受け取る。  
俺は思わず首を横に振った。

大概、女と別れると何か言ってきたり、家にいるようになる。  
新しく彼女が出来るのと朝帰りが多くなったりする。

なんとも分かりやすい行動なので、祐也の付き合い合っている期間は大体把握していた。

四年間：付き合いが続いている彼女なんて聞いたことは無い。

「なあ、ミヤ…そろそろ良いだろ？」

「な…にが？」

「キスの意味…はつきりさせようぜ」

そう言って、祐也は俺に口付ける

いつものように軽く…

しかし、それは何度も降ってくる

額に…頬に…脛に…

「ミヤ…お前はどんなんだよ」

「俺は…」

” はっきりさせよう”

それは、俺の気持ちを言っても大丈夫なのだろうか

伝えても、それでもなお…こいつは隣にいてくれるだろうか

不安が無いわけではない…

でも、俺もはっきりさせたいのは本音。

何か答えが見つかるのなら…

たとえ…別れでも…

「俺は、四年間…気持ちのないキスをするような人間じゃない」

「ミヤ…」

「俺だって男だよ。下心くらいある」

祐也の言葉を借りて言う。

そして、今度は俺から祐也に口付けた。

よもや、俺からキスされるなんて思ってたんだろっ。

呆然とする祐也に、思わず笑いがこみ上げた。

「びつくりしすぎだろ、祐也」

「おまつ…そりゃ、びつくりするだろうが！」

笑われたのが恥ずかしかったのか、祐也は薄暗い中でも赤くなっているのが分かる。

だけど、これで分かった。

祐也はこの先も一緒にいてくれる

きつと俺たちの気持ちは同じだったんだ

「ミヤ！いつまで笑ってんだよ」

「だって…あゝ…おかしい……」

「あんな、笑うところじゃねえだろ」

呆れた声がするけど、笑いは止まらなかった。

そりゃそうだろ？

今までどれだけ不安だったか。

どれだけ自分の気持ちを押さえ込んでいたか…。

それが、受け入れられたって分かったらテンションもあがるだろう？

きつと、気が抜けたんだ。

安心したら、余計に笑いが止まらなくなる。

「ミヤゝ…おーまーえーなああ」

「ごめん、ごめん」

ようやく笑いを抑えた俺は、ふうつと一息つく。

そして改めて祐也を見た。

「…祐也、ありがとう」

「ん？なんだよ、いきなり」

「なんとなく、言いたくなっただけ」

「変なヤツ」

それだけ言うと祐也は立ち上がり部屋の電気をつける。

床に放置された俺の携帯と、帰宅してそのままになっていた祐也のカバンをテーブルの上に上げ、俺の腕を掴むと立ち上がらせた。

「体調は？」

「少し…疲れただけ。明日休みだし」

「ならいいけどよ」

祐也は俺を椅子に座らせると、冷蔵庫からミネラルウォーターのボトルを出し、こっちへよこす。

「飲めよ」

「ん、サンキュ」

「おう。それからミヤ、真明に明日にでも断りの電話しておけよ」

「分かってるよ」

そこは念入りに言う。

なんとなく、嬉しい。

だけど、彼は更に嬉しい言葉をくれた

「後な…真明に”ミヤちゃん”って呼ばせるの止めさせろ」

「別にいいけど…なんでだよ？」

別に呼ばれる名なんて、何でも良い気がするのに…

「ミヤって呼ぶのは俺だけにしておけ」

「え？」

「高校の時から…これからもずっとだ。俺だけが呼ぶお前の名前だろ？」

（なんだ…）

もうずっと…こいつは俺を特別視していたんだ…

それは気付かない程些細なものだけれど、きつとこいつにとっては大切な事。

「そう、だな」

「俺も美結に明日電話するし」

「…珍しいな、お前が電話するの」

「まあな。けどもっ、”彼女”は必要ないからな」

祐也が笑って言う。

「たまには俺から別れ話だ」

「だな」

俺も一緒に微笑む。

今までと変わらない会話。

それでも、確かに違うものがそこにあった…





- 9 - (後書き)

ひとまず落ち着きました。  
ラスト1話で終了です。

## 最終話

次の日：

大学の食堂に、ぼんやりと真明は座っていた。

「暗い顔してんなあゝ、真明」

ポンつと真明の頭を叩くのは、シゲ。

「なんだ、シゲか」

「なんだとは失礼だな。真明、フラれたんだって？」

「…誰から聞いたんだよ」

不機嫌な声で真明がシゲを見る。

いつもの柔らかな物腰はどこへやら…。

「俺は情報通なの。何でも知ってたんだよ」

「……なら、傷心の俺を少し静かに放っておくことはできないのか？」

「だから、傷心の幼馴染を慰めてやろうと食堂まで来たんじゃないの」

足を組んで座る真明の隣にシゲも座る。

「なあ、慰めてやるつか？」

「お前は俺の好みじゃない」

「…あのなあゝ、そういう意味の慰めじゃなくってだな。今晚、食事作ってやるよ。お前のマンション行ってやるって」

シゲは頬杖ついて真明を見た。

地元にいた時から一人暮らしをしていて、料理方面は自信がある。同じ地元の真明も知っている事だから、時々食事を作ったりしていた。

「俺のリクエスト、聞いてくれるんだよな？」

真明が尋ねる。

「構わないけど、あんま面倒なのはかんべんな」

そう言つて、シゲはタバコに火をつけた。

「だーけどさ。雅はダメだと思ったよ。あいつ、祐也大好きだよ」

「知つてたなら教えるよ」

「教えてもアタックしたんだろ？」

「…多分」

真明も、シゲからタバコを貰い同じように火をつけた。

ゆらゆら揺れる煙に視線を流す。

「好み…だったんだけどな」

呟けば、シゲが苦笑を洩らした。

「仕方ねえんじゃない？ 大体、祐也を敵に回すと怖いと思うよ？」

「鴨井は彼女いただろう」

「一応…ね。でも、あいつ…いつも彼女に興味もたないもんな。モテるくせに勿体無い！ 俺に分けるって言っただっ」

「…お前はダメ。良い人で終わるタイプ」

真明にキツパリ言われ、シゲが凹む。

「もう少しオブラートに包めば？」

「同じ事だろう？大体、今はミヤ…田之上からの電話で俺の方が凹んでるの」

「何か言われた？」

「ん…。デートのお誘い断られたのと…ミヤって名前で呼ぶなってさ」

「ふむ…。雅のやつ、祐也に何か言われたのかね？」

シゲが腕を組む。

「さあ？はつきり言わないけどね。多分そうじゃないかな。鴨井も田之上が好きなら、最初から捕まえておけばいいものを…」

フリーだと思えば、手に入れたくなる。

誰かのものだったなら、気持ちも抑えられたのに

ただの負け惜しみだとしても、思わずにいられない

「しゃーねーよ。そういう二人なんだって」

「ああ…。今回の事で気付いたよ」

「まあ、新しい恋を見つけたらつきやねえわな。また合コンする？」

「傷が癒えたらな」

「見た目によらず、繊細」

シゲが楽しそうに話す。

それを見て、真明も口だけで笑った。

いつまでも…こうして傷ついているわけにはいかないから…

\*\*\*\*\*

俺は、休みを祐也の借りてきたDVDを日長見て過ごした。

体調は不思議な程良かった。

やはり精神的なものだったのだろう。

ふと、流していたDVDから昨日聞いたラブソングが流れてきた

（あ、これ…映画の曲だったんだ）

タバコを吸う手が止まる。

映画から流れる曲に耳を傾ける。

英語の歌詞で意味はきちんと理解は出来ない。

けれど、昨日よりもずっと心地良い曲に聞こえるから不思議だ。

映画をそのままに、俺は自分の部屋に戻る。

そしてベッドを眺めた。

昨夜…

『部屋一緒にしようぜ？バイト代、今月結構入るからでかいベッド  
買えば二人で寝れるだろ？』

そう提案してきた祐也

最初は一緒に寝るなんて恥ずかしかったけれど…

これからはどれだけ一緒にいても時間が足りない。  
別々の部屋で眠るなんて、淋しくなりそうだ。

（俺も、参ってるな…）

自嘲気味に笑い、携帯を手にする。

『家具、見てくるから。授業終わったら連絡しろ』

そう一言祐也に送信すると、俺は部屋を出た。

END

## 最終話（後書き）

終了です。長々読んでくださってありがとうございました。

今は懐かしい一番最初に書いたBLなので、思い出深いです。

後は18禁になるものと、友人から貰ったリクエストの話を後日談で書いてます。

またアップできたらと思っています。

良かったら感想などいただけたら嬉しいです



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8504/>

---

LOVE SICK

2010年10月19日23時42分発行